

堂々ノ内Ⅱ遺跡について

1 **位置・立地** この遺跡は島根県雲南市三刀屋町中野に所在し、斐伊川の支流である中野川最上流域の山すそに位置します。

2 **遺跡の概要** 調査では中世（鎌倉時代～室町時代）のたたら跡と江戸時代の建物跡のほか縄文時代前期の終わり頃（約6千年前）の土器や石器が発見されました。

3 **たたら跡** たたら跡は原料の砂鉄から鉄を作り出すための施設で、発掘調査では以下のものが発見されました。

・**建物跡** 屋根や壁のようすは不明ですが、柱穴や壁体溝^{へきたいこう}の位置からおおよそ、幅13m、奥行き8m程度と推定され、屋内は想像以上に広がったことがわかりました。

・**製鉄炉跡** 炉本体は粘土で作られ、操業後に破壊されるため破片しか残りませんが、炉床と呼ばれる地下部分はよく残っています。炉床には粉炭がたくさん敷き詰められており、その範囲などから炉の大きさは、およそ長さ2.0～2.3m、幅1.5mと推定しています。フイゴ（送風施設）のようすは不明ですが、炉の破片から片側に10cm間隔で約10個の送風穴が付いていたと推定されます。

・**排滓土坑** 炉から流れ出る鉄や滓（かす）が溜まるくぼみで、炉床と同じくらい強く熱を受けています。焼け具合から炉には片側3方向に排滓用の穴があったようです。

・**排滓場** 創業時に出る滓や破壊された炉の破片を捨てる場所で、取り残しの鉄も出土しています。これらを調べることで、どんな炉でどんな鉄を作っていたかがわかります。

4 遺跡の意義

発見されたたたら跡は地下構造がよく残っており、炉の破片も多量に出土していることから、中世のたたら^{せいてつろ}のようすを具体的に復元できる可能性があります。そうなれば、現存する国内唯一のたたら「菅谷たたら」などの近世高殿だたらや、より古い古代のたたらとの比較も可能となり、鉄生産の歴史解明が一步進むことが期待されます。

